

多文化社会の可能性と困難

—ウィーンの社会史を通して—

中 江 桂 子

1. ひしめきあう異文化と都市——近代前史のウィーン

オーストリアの近代史を振り返るとき、多くの場合はハプスブルグ帝国の崩壊とそれ以後の戦間期、および第二次世界大戦後がおおきな節目であることは、おおかたの共感を得ることができるであろう。その近代史は、640年の長きにわたるハプスブルグ王家の統治のなかで培われた社会的基礎によって強く影響されており、ハプスブルグ家が色濃くこの地の個性を作り上げることになったことは言うまでもないだろう。本稿ではその歴史の深い根を少し掘り起こしながら、あらためて多文化都市ウィーンを思考の対象としたい。

ウィーンという国際都市の個性というテーマに思考を至らせるならば、ハプスブルグの前史から論をはじめるのがふさわしいと思う。紀元前500—400年頃のこの地はケルト人の多く住んでいた地域だったが、当時すでにたびたびゲルマン人の侵入をうけ、ローマに庇護を求めたため、紀元前15年にローマの属州になっている。古代からケルトとゲルマンおよびローマの対決する場所であった。1世紀には、神聖ローマ帝国はスラブ民族にたいする前衛基地としてカルヌントゥムを置いた。このローマの遺構は、現在のウィーンから東に40キロほどのドナウ川の下流にあり、日帰り観光ができる距離にある。その当時は現在のオーストリアとハンガリーがあわせてパノニアと呼ばれていたローマ時代であり、まだハプスブルグ家ではなく、バーベンベルク家がこのカルヌントゥムの領主であった。その遺構に足を運ぶと、そこが前哨基地として対決の場所であつ

たと同時に、北ヨーロッパの琥珀を南ヨーロッパへ流通させる、いわゆる「琥珀の道」の重要な拠点であったこともわかる。軍事基地でもあり商業地域でもあるといった土地にはもちろん、宮殿や劇場、円形闘技場なども建設されたが、円形闘技場にいたってはローマ帝国の支配権の及ぶ地域で5本の指にはいる大きさを誇っていたというから、その繁栄ぶりがおのずからわかるといえよう¹。そしてこの地域がすでに、ケルト世界、ゲルマン世界、スラブ世界とローマ世界との衝突と混交、すなわち共存の地でもあったことを容易に想像することができる。

そして現在のウィーンもまた、紀元1世紀頃に、ローマがカルヌントウムの側面支援のため軍営としてウィンドボナという街をつくり、そこを囲ったことがこの都市のはじまりであった。なにもないところに軍用基地を囲む要塞がまず作られたのである。ここは紀元2世紀のあいだはずっと、ゲルマンとローマとのにらみ合いと戦争の地となっている。マルコニマン戦争でゲルマンを追い払うことに成功したのち、マルクス・アウレリウス帝のてこ入れによりウィンドボナはローマ都市として再建された。彼はここで『自省録』の執筆をし、この地で没する。このような経緯を考えると、マルクス・アウレリウス帝の威光とその歴史がギリシャポリスの伝統の強い文化的影響をウィーンに与えたと考えることができよう。しかしよく知られているように、ハプスブルグ家という南ドイツを中心的な領地とする貴族がこの地域の統治にあたるようになるにつれ、この地にゲルマン人末裔であるドイツ人たちが主要な住人になるのは、ごく自然な変化であった²。

13世紀になって、ハプスブルグ家がルドルフ1世を当主として戴冠し、それから始まる640年にわたる長い統治が続くのだが、このあいだ平穏な統治が続いたかといえば、もちろん、そうではない。むしろ、この多民族・多文化の統治体は大なり小なり分裂と融和の間を揺れ動き続けたという方が、より正確だろう。ハプスブルグの時代からすでに、少なくとも12の異民族がこの小さな都市にひしめき合うように住んでいたのだ。現在の用語でいえば、その12とは、ドイツ人、マジャー人、チェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、ウクライナ人、スロベニア人、セルビア人、クロアチア人、ブルガリア人、ルーマニア人、イタリア人である。また、

ウィーンはのちに、16世紀と17世紀のトルコ軍の激しい侵入をうけ再び戦闘の地となるが、のちにリング通りとなるウィーンを取り巻く城塞は、このときにも必要な役割を果たした。この要塞のもと、すでに複合的な民族で結成されていたハプスブルグ軍が、一致団結してトルコ軍を撃破したのであり、その歴史的勝利の美酒はウィーンっ子たちの語り草になったことはいうまでもない。またそのとき逃げていくトルコ軍の置き土産が、カフェやパンなどの文化として現在に伝えられているという³。ここでもまたウィーンに、文化の衝突と混交、そして醸成の種がまかれた。

異質なものの共存が人間ひとりひとりには不可避で絶対的な生活条件として存在し続けたこの地は、たとえば同じドイツ語圏ではあるが、ほぼ継続的にゲルマン民族によって構成されていたドイツとは、やはり決定的に異なる都市の個性を育成することに帰結した。プロイセン的なものとオーストリア的なものとのはっきりした違いがあると考えてよい⁴。この違いがオーストリアに独特の、共存の個性を生み出してきたといえるだろう。まさにこの城壁の内部は、異文化を共存させつつウィーン文化を醸成する胎内のような機能を果たすことになる⁵。これについてはのちにあらためて論じよう。

また異文化のひしめく歴史として、ここでもうひとつ注意しておかなければならないことは、ウィーンが英仏のように一早く絶対王政の体制が確立し強い中央集権的な政治体制がとられた国々とは異なっていたという事情もあるだろう。アルプス以北の中央ヨーロッパ地域では、小さな領主国家がそれぞれに分立しており、このためそれぞれ独自の文化の伝統が比較的残されてきたといってもよい。広大なハプスブルグ帝国とはいえ、その治領地のなかには、プラハ・ブタペスト・ワルシャワなどをはじめとして宮廷文化の独自の歴史を紡ぎ続けた場所がたくさんあることである。そして、ハプスブルグの皇帝たちはみな、異質な文化的起源をもつそれらの宮廷との交流をつねに気にし続けたし、みずから広大な領地を旅することをライフスタイルとする場合が多かった。そしてより優れた文化にたいして尊敬の念を表すことに厭わなかった。それは、巨大な帝国を多様なままに統治していくための技術であったかもしれないし、文化政治だという言葉でまとめてしまうことは不可能ではないの

かもしれない。しかし、ハプスブルグの文化と多様な地域それぞれに息づく人々の生活文化とのつながりないし均衡を考えようとする場合には、抽象的な概念で整理してしまうことは、やや乱暴に過ぎる気がするのである。というのも、「一般的」とか「普通」とか、そのような「ものさし」を単純につくらず、たとえあったとしても単純には適用をしないというのが、実はこのような複雑な社会を生き抜くための技術であったような気がするからである。

2. 摩擦と感動のポリティクス——支配と誤解のはざままで

常に異文化との接触と摩擦が強いられながらも、さらに多様な個別的情况を全体として統治していかなければならない。この困難な役割を託されたのがハプスブルグ家であったが、この王たちにまつわり伝わる魅力的なエピソードは、ほとんどがこの困難へのユニークな挑戦であったように思われてならない。そしてきわめて個性的だ。

ルドルフ4世（在位1339～1365年）は、土地の所有権や刑事政策の変更を強権的に進めたため、政治的には功罪の評価が激しく分かれる人物ではあるが、ドイツ語圏で2番目に古いウィーン大学を設立した。ルドルフ4世としては、この設立は、プラハにカレル大学ができたことへの対抗という意味合いが強かったけれども、その後長きにわたり、ウィーンの求心力を発揮し続ける知の殿堂が整えられたのである。おそらく彼が残した遺産としては最大のものがこの大学であった。

マキシミリアン1世（在位1493～1519年）は、現在でもなお「世界で最も美しい図書館」と謳われる現在の国立図書館の基礎を設立している。1冊1冊は、ヨーロッパないしその外の世界からのもたらされる情報と文化の結晶だ。それらはハプスブルグの宮廷として力を持たば持つほど集められ必要ともされるのだが、それらをただ集積されるだけではなかった。マリア＝テレジアの父であるカール6世は、これらの蔵書を王宮のメインサロンと見紛うばかりの、壮麗な天井画に縁取られた装飾あふれるザールに収めることにしたのである。このいわば知識の神殿は、効率的で経済的な統治のための情報集積という目的をはるかに超えて、世界の

多様性を擁するハプスブルグの誇りと同時にその多様性への賛美をも、かたちにあらわしたものとなっている。またマキシミリアン1世は、図書館とほぼ時を同じくして、現在も世界的な人気を誇るウィーン少年合唱団を創立(1498)している。王立礼拝堂の日曜日のミサに行くと今でも彼らの声を聴くことができ、ウィーン観光には欠かせない場所ともなっている。この少年たちの声が王宮の礼拝に不可欠となぜ彼が考えたのかは不明ではあるが、これはウィーンと音楽とのかかわりを考える上では重要な試金石となった。この王立礼拝堂のミサで少年たちを歌わせる王立礼拝堂楽団は、現在の国立歌劇場オーケストラ(ウィーンフィルハーモニー交響楽団)のルーツとなり、また、ハイドンやシューベルトともその歴史に名を連ねるほどなのだ⁶。もっとも、少年合唱団から巣立つ子供たちのごくわずか以外は、その後は音楽のプロではなく、一般市民すなわち音楽の質の高い聴衆層の一部となって音楽の文化を支える側となる。歴史をたどると、オーストリア帝国崩壊や戦争の時代やナチスの時代にこの少年合唱団が消滅することはあったものの、そのたびにこの合唱団は復活を遂げ現在に至るのも、このような文化を支える素地が歴史をつうじて醸成され備えられてきたからだといえるだろう。そして今、この少年合唱団は世界の少年たちを対象にオーディションを開いており、また女子の団員も「アウガルテン子供合唱団」という別の名称にはいるが、ウィーン少年合唱団の組織の中につくられている⁷。時代に応じて変化しつつ、しかし音楽の感動をつうじて人びとを結びつける文化を500年以上継続していることの意義を忘れてはならないだろう。日本人の支援者もかなりいる。

異質なものの共存が奇跡的にもハーモニーとして結実するとき、それはこのうえない美となり、感動を呼び起こすこと。異なる人びとがその感動を共有することによって、社会がいくぶんか穏やかになることを、ウィーンは歴史を通じて学び続けるのである。

ルドルフ2世(在1576~1612)は天文学者ケプラーを友として天文学に凝るユニークな王だったが、主な宮廷行事は画家のアンチンボルドに任せっぱなしにし、ギリシャ以降のエロティックな絵画の収集にいそしんだという。もっとも30年戦争のときにこの絵画コレクションのかなり

は失われたが、主要なものは残された。ルドルフ2世の末弟のオランダ総督のアルベルト公（在1559～1621）は、ルーベンスと友人となり、またルーベンスの友人のブリューゲルを庇護して、現在の美術史美術館のコレクションにおおいに貢献することとなった。今でも世界最大のブリューゲルコレクションはウィーンにある。もっとも封建領主が芸術家を庇護することはハプスブルグ家に限ったことでは無かったはずだが、この審美眼はどこからくるのだろうか。ルドルフ2世の治世でもう一つ忘れるべきでないことは、スペイン乗馬学校をウィーンに作ったことである。彼の母はスペイン王カール5世であったという縁もあったのだろうが、実際この学校設立のいきさつはよくわからない。しかし結果的に古典馬術の鍛錬をおこなう唯一の施設がウィーンの宮廷横にできたのである。マリア＝テレジアは幼いころ、男装でこの乗馬学校に入り込み馬術を身につけたという。彼女が女王として広いその領地を治めようとした際、その流麗な馬術の腕によって、民族的に異なる領主たちにたいしても、女として侮られることなく統治者としての威信が支えられたことが伝えられている⁸。騎馬民族にルーツをもつ異民族には、その馬術は強力なメッセージとなったに違いない。それに加えてマリア＝テレジアは啓蒙君主にふさわしく義務教育制度をはじめてハプスブルグ帝国に導入した人物だったが、それは同時に、帝国内の多民族のそれぞれの言語の教科書をつくる作業をも進めた。決してドイツ語による教育を押し付けることなくこの時代すでに多言語教育を実施した功績などをふりかえると、帝国内に多様性を成り立たせていくことに、相当の神経を使っていることがわかる。異なる文化の人びとに訴える威信とは何か、この問題に接近することなしには、640年にわたる長い統治が成功した理由は説明できない。

とにかく、異様なほど文化狂いのハプスブルグの皇帝がたくさんいるのだ。フェルディナント3世（在1637～1657）、その息子レオポルト1世（在1658～1705）などは熱狂的な音楽家であり、みずから作曲し、舞台にも上がるほどのオペラ好きであった。レオポルト1世などは有能な将軍たとえばオイゲン公のような部下を持ち、そのおかげで音楽に浸ることができたであろう。ヨーゼフ1世もカール6世も、やはり相当の音楽家だった。その娘であるマリア＝テレジアが、きれいなソプラノだったことは、

この父や叔父たちによって伝えられている。このような皇帝たちのもとに、名誉と地位を求めて各地から芸術家たちが集まってくるのも自然なことだった。だからこそ現在では「音楽の都」とも呼ばれる文化的素地が長い時間をかけて整えられてきた。しかし、当のハプスブルグの人々はウィーンが中心になることで満足などしていないのである。たとえば、ハンガリーの有力者であったエステルハージー家はハイドンを団長とする楽団を持っていたが、マリア＝テレジアは、よいオペラを見たかったらエステルハーザ城へ行きましょう、と言ったことが伝わっている⁹。オーストリアとハンガリーの国境周辺のドナウ川河岸地帯は、オーストリアのツヴァイゲルト種という在来のワイン種のブドウ栽培が盛んで、のどかで美しい風景のある地域であり、短い遠出としてはちょうどよい距離である。ちなみに、国境からハンガリー側へ入ったあたりにあったエステルハーザの宮殿は、今でも土地の人が音響の良さを自慢しているホールをもつ。これはハイドンの意見を取り入れて建てられたものだ。やがてここからハイドンは世界の宮廷に招かれる大音楽家となって巣立っていく¹⁰。また、フランツ・ヨーゼフの皇妃であったエリザベートは、ウィーンの王立歌劇場よりもハンガリーの歌劇場を好み、オペラを楽しむためにわざわざウィーンからブタペストまで足を延ばした。ブタペストの国立歌劇場には、エリザベートの特別席が用意され、人びともまた、ハンガリー語まで身につけてハンガリーを愛したこのウィーンの皇妃を愛したのである¹¹。1867年のアウスグライヒ（ハンガリー自治権を認めた条約）を締結する際には、エリザベートはハンガリーを支援しフランツ・ヨーゼフを説得した。この美しい物語はオーストリアとハンガリーをむすぶ逸話として、人びとのこのころのなかに繰り返されるものである。

この類の例をハプスブルグの皇帝たちについてあげていくとするなら、それはとても誌面が足りるものではない。さて、こんなに文化狂いの皇帝たちが、本当に政治をうまくやっていたのだろうか、と考えるといささか肌寒い心地になる。実際、そんな文化的な出来事など吹き飛ばしてしまうくらいに、大小さまざまな戦争の歴史としてハプスブルグの歴史を書くことも可能だからである。現実の政治の場面では、民族対立と諸民族への抑圧の歴史もまた、上げようと思えば数知れない。血なまぐさい

事件もまた数知れない。この美しい物語群に語られるほどかれらの文化は帝国内に融和をもたらしたのかといえば、さらに加えて寒々しい心地になるのも、また確かである。これらのエピソードは現在の立場からウィーンの的に都合の良い物語が伝え残されているに過ぎないという考え方もあるだろう。

しかし、これらの物語群は、少なくともハプスブルグの領地やあるいはウィーンという都市に生きる人びとにとっては、限りなく反復して「思い起こす必要のある伝説」であったことだけは確かである。多様性のなかに必然的な葛藤や衝突が人びとの日常に常在するようになればなるほど、事実や人間の重層性や多面性とのあいだで、不信感も疑心暗鬼もどうしようもなく湧き上がる。それを解消することなど、人と人との間でもできないし、まして、くにとくにとの間ではほとんど不可能にちかい。ということは、人であれくにであれ、この不信と葛藤をどのように治めてもらうのかという点について、だれもが心を砕かざるを得ないということでもある。細かな政治技術のひとつひとつに精通することはもちろん必要ではあるが、まったく十分ではないのだ。皇帝は政治技術屋であるよりも、いわば人間臭い人間であり、良いものを良いと素直に評価してくれる人間であることと、それを伝える物語が、このような社会では大きな政治性を発揮するのである。しかも、人間臭い人間のしてきた明らかな刻印とその物語が、時代を経ても価値の薄れることのない確かな遺産として、人びとの目の前にそのままに存在する。誰もが感動的な物語を追体験できるこのことが、実質的に支配を達成してきたのではなかったか。いたるところにある摩擦は、感動と共感のポリティクスによってかろうじてやや温和なものに変容させられる。支配は多くの英雄的な物語によって、理解と誤解をないまぜにしながらか、ようやく私たちはそれを受け入れるのである。この機能を軽んじて考えるべきでないだろう。

言い換えれば、ハプスブルグの長い歴史のなかでは政治を政治としておこなうよりも、文化という土壌を作ることが、長期的に見れば結果として政治を達成するのだと考えた皇帝たちがいても、不思議ではない。とはいえ、彼らにとりわけ楽天的な遺伝子が受け継がれていたわけではない。目の前の敵や摩擦を起こす相手は、時代や地域によってさまざまに別対応を

強いられ、複雑で、単純な勝利は難しく、彼らには激しいストレスが常に襲い掛かっていたはずである。しかし異文化共存が強いられ潜在的顕在的亀裂が日常的に大きく、かつ複雑であればあるほど、実は、彼らは文化のちからをより必要としてきた。文化は自分や目の前の相手よりもずっと長生きであり、後世へのメッセージとしては、目の前の政治よりよほど強力かもしれないからである。少なくともこれらの多くの物語の中では、文化は政治の小道具ではない。文化の深い懐のなかに政治が包み込まれてしまっていて、その痛みも苦味も抱え込みながら、時には血さえ吐きながら、なお文化が常に新しく創造され続けるということなのだ。

3. 解体される帝国／沸騰する文化

長いハプスブルグ帝国の歴史の中で、最後の皇帝フランツ・ヨーゼフの治世は、とくに激震の続く時代である。1848年の革命のあと皇位をひきついで彼は、その最初から帝国の分裂と解体の入り口に立っていた。19世紀以降は政治の場面でウィーン会議やウィーン体制などが続き、ヨーロッパ全体がメタモルフォーゼのなかにあった。この時期、強大なハプスブルグ帝国は解体への道をひたすら進む。しかしウィーンはそれと反比例するように、それまでの文化と芸術の歴史が近代都市ウィーンというかたちのなかに再配置され、多様性を減ぼさない構造を形成していくのである。

19—20世紀にかけて、都市化と産業化の加速度的な発展が都市を急速に膨張させるにともない、それまでは文化を育む都市であったものが、その爆発的变化において臨界を超え、やがて文化を廃墟化する都市へと変貌をとげることについては、すでにシュペングラーやマンフォードらにおいて繰り返し指摘されている¹²。それが多くの都市の予定された道筋だったときえいえる。しかし幸か不幸か、この運命をウィーンだけは逃れることになった。というのも、大半のヨーロッパの都市が、産業化と大衆化を伴いながら爆発し、都市を賃金をめぐる戦場と化して全体を退廃させていったその同時期、はからずもウィーンは帝国の縮小を強いられており、それでもウィーンを取り巻く人口は増加してはいたものの、その変動はパリやロンドンと比べるとずっと穏やかだった。それに加えて、フランツ・ヨー

ゼフが城壁を取り壊し、その後にリング環状通りを建設することを発表したからである。

もちろん、かつて城壁であった場所をリング環状通りとして再整備していくことについては、社会経済的な理由が色濃かった。ウィーンの人口と都市機能は城壁のなかに収められるほどすでに小さくはなく、かつて外敵を押し返した歴史的な城壁も、いまでは邪魔なものになっていた。フランツ・ヨーゼフは、この城壁を取り払うのと同時に、リング環状通り沿いの地域の再開発を進めた。というより、新興勢力であったブルジョアジーが、新しい国家体制を整備するにあたり必要と思われる多くの施設をこのリング環状通りに競うように建てたのである。現在のウィーンの観光スポットはリング環状通りを歩くことで、かなりの部分を目にする事ができる。完成した年をとりあえず並べると、ゆかりある音楽家たちの像が林立する憩いの場である初の市立公園（1862年）がリング環状通りの外側に整備されたのに続き、王子の住まいとして建設されのちにホテルとして使われたインペリアルホテル（1863年）、国家の王立歌劇場と楽友協会¹³の建設（1869年）、ウィーンでの万国博覧会（1873年）をはさみ、市庁舎（1883年）、国会議事堂とウィーン大学（建て替え）（1884年）、ブルク劇場（1888年）、美術史美術館・自然史美術館（1891年）、などである。もちろんリングの内側には王宮がありその威容を示しているが、その一方で、その傍まで誰もが行き交うことができるようになった。歌劇場や楽友協会がブルジョアジーたちに開放されたのも、リング通り開発にともなう都市装置の更新であった¹⁴。この大変貌は、ウィーンの人びとにどれだけ解放的な気分を与えただろう。

しかし城壁が物理的に無くなったことは、社会に障壁が無くなったことを意味するかといえば、そうではなかった。突如として出現した城壁周辺の開発地は、ブルジョアジーたちが競争的に投資できる対象となったのであり、またこの時代で一旗揚げようとする人びとの関心にもなった。結果、リング内は基本的にはギリシャ以降のポリスの伝統を引きずりながら皇帝と宮廷を中心とした時代の歴史的遺産群、リング周辺には拡大した帝国のリングからはみ出した施設と振興するブルジョアジー階層の人びとのための、豪奢ではあるが解放された建設物がひしめいた。都市につきもの

の貧困な階層や失業者や移民は、リング環状通りの外側の地域に取り残されたままだった。リング環状通りの、宮廷とブルジョアジーからの資金による徹底的な都市改造は、城壁を壊したかわりに経済的文化的な壁として機能し、結果的にこの歴史的都市の保存に大きな役割を果たしたといっ
てよい。今でもリングのなかに労働者階級が住む地域はなくスラム街もない。それらははじめから、外側にしかありえなかったのである。かくして、ウィーンの都市構造は、中心から外縁へ向かって、旧体制時代の歴史遺産、19世紀から20世紀初頭の遺産、そしてその外側、というように、ほぼ同心円状に構成されており、これが大きく崩されることはなかった。それぞれが独立した存在でありながらも、偶然にもリング環状通りは一回りするだけで建築が博物館のように並び、現在のウィーンの魅力を高めているといっ
てよい。産業化と都市化の波をうけてもなお、それぞれの時代の都市のかたちが、ほぼ保存されることになった点については、おそらく他には例がないだろう。もちろんそれぞれの時代には、固有の文化衝突とそれにと
もなう混交があったのだが、これもまたそのまま刻印されているのである。ただし、近代から現代にかけてもなお、ウィーンの人びとはつねに宮廷文化がもたらす厚い歴史と対峙し続けなければならないことに加え、階層的な多様性をも可視化され、対決せざるを得なくなったのである。歴史の蓄積のなかには、本当は忘れたいであろう傷も恨みも嫉妬もあろうが、それらもそのままにかたちとして残される。過去との葛藤を抱え込ませながら目の前の現実を生きるという、複雑に価値観がからみあった生活を強
いられるということでもあった。

シューベルト (1797—1828) は、音楽家の家に生まれ宮廷を渡り歩いていたモーツァルトやベートーベンとは異なり、31年という短い生涯をウィーンの城壁の外側で新興市民階級として過ごした。すぐそこに、宮廷のサロンがあったが出入りする機会は得られず、ベートーベンを生涯尊敬したにもかかわらず、瀕死のベートーベンを見舞う機会に一度だけ恵まれた
ただけだった。厚い身分の壁をつねに感じながら、政治的な抑圧と生活上の不安定さにさいなまれながら、旅をする余裕など全くなかった。しかし新興市民階級出身の文学者・画家・法律家などの多くの人びとが、この同じ階級出身の音楽家の周りにはよく集まっ
ていて、このサークルはシュー

ベルティアードといった。彼がひくピアノを中心に集い楽しむ人びとの絵画やスケッチが残されている¹⁵。友人の多かった彼は、どこか牧歌的な音楽をいくつも作品にしていることも確かである。しかし、シューベルティアードは彼の閉塞感を解いてはくれなかったようだ。彼の精神は放浪から解放されることはなく、精神のさすらいと深い孤独、絶望と希望、愛とその不可能、というテーマの間で彼の音楽は揺れ動く¹⁶。シューベルトの音楽は、当時の新興市民階級の都市生活の不安を基調とし、ロマン派の象徴となった。現在でも彼が過ごした家は残されており、等身大の彼の息づかいを感じることができる。リング環状通りから離れているために観光客はあまり来ないのだろう、その静かで小さな家には、シューベルトといえただれもが思い出すあの丸いメガネが、そのままに残されている。

フロイト（1856—1939）は、まさに城壁が壊されリンク環状通りの大改革と同時代にウィーンで過ごした。シューベルトを苛んだあの、絶望と希望、愛とその不可能というテーマを、彼は精神分析という新しい学問のテーマとした。彼の家もまたリング環状通りの外側にある。彼の家のあるベルクガッセは何の特徴もない普通の通りで、トラムに乗っていてもここがあの世界の学者のいた場所だということを知ることはできない。その家の前に立って初めてそこがフロイトの家だということがわかるに過ぎない。しかしここだからこそ、物理的には破壊されたはずの障壁が心の中に何重にも再生されてしまうプロセスを研究するのに、その対象は目の前にふんだんにあったのである¹⁷。彼の家からリンク環状通りにあるウィーン大学まで歩いて30分弱ほどかかるだろうか、その道を歩くなかで、この社会状況によって否応なく拡大させられる時代病のひとつが嫉妬であることを、実感するほかなかったであろう。フロイトは音楽や歌劇に特別な愛着を示す人間ではなかったが、国立歌劇場でのカルメンだけは、繰り返し観に行ったという¹⁸。

クリムト（1862—1918）は新しい絵画の旗手として、ほとんどフロイトと同時代に生き、そして帝国の消滅とともに死んだ。古典派的な教育を受けたクリムトは早くから装飾家として認められ、リング環状通りの建築物である美術史美術館・ブルク劇場で天井画をはじめとする装飾作品を手掛けて名声を得ている。31歳でウィーン美術アカデミーの教授への推

薦を受けた。しかしここから彼の人生は反転するのだ。1893年には推薦を受けた教授職に任命されることはなかったし、それに続く1894年にはウィーン大学の大講堂の天井画の依頼を受けたクリムトだったが、その作品が人間の理性への賛美をテーマとした依頼にそぐわないという抗議に巻き込まれ、最終的には契約を破棄した。彼が描いたのは理性ではなく、生命の存在の神秘とそれに向き合う人間のエロスだった。これも一つのきっかけだったであろう、彼はウィーン分離派を1897年に結成し、以後クリムトの人生の最後の20年間は、お金を得るために女流階級の女性たちの肖像画の注文を受けながらも、分離派の仲間たちともっぱらリンク環状通りの外側で活動することになった。意図的なのか偶然なのか、分離派美術館であるセセッションは、彼を教授にさせなかったウィーン美術アカデミーのすぐ隣にある。そして分離派が集まったカフェ・シュペールは、リンク環状通りから南に坂をずっと下ったところにある。この坂の下のカフェから、坂の上にあるセセッション、さらにその先にある古典的美術の殿堂を臨んで、クリムトはどのように感じていたのだろうか。クリムトは生涯多くの愛人とともに生きたが結婚はせず、死のイメージから逃れられたことはついになかった¹⁹。

文化の沸騰するような生まれ方は、異なる世界とともに生きることを強いられた人びとの抱え込んだ、その苦しみとともにある。その原因となる異質性は、歴史的なものも、民族的なものも、階層的なものをも含み、複合的にウィーンという都市のなかで絡み合い、目に見えるかたちで保存されてしまったのだ。19世紀後半は、帝国の崩壊という現実を抱えるなかにも時代に希望をみいだそうとした人びとの時代だった。フランツ・ヨーゼフも、市民階級の多くも、である。そして希望を探した誰もが、同時にみずからの運命の深い憂鬱をも知ることになった。

4. 文化を揺籃しつづける多文化都市ウィーン

しかしその重い苦しみを、苦しむだけで終わらせないのがウィーンでもある。異質性とは、苦しみの原因であるとともに、喜びの原因にもなりうる。困難の先にあるこの喜びのつくり方を見せてくれるのもまた、

ウィーンであるように思われる。

ウィーンは「音楽の都」と言われる。またオペラやオペレッタなど劇場の都でもある。それは世界に名をとどろかせる楽団があり、劇場がたくさんあるから、という理由なのだが、それではなぜ、そのような楽団や劇場が育ったのだろうか。

リング環状通りはトラムで一周しても1時間もかからないし、ウィーンの外縁を囲む外環状線にしても、東京の山手線と勝負できるほどの、小さな都市がウィーンである。そこに、数多くの劇場がある。オペラ座やフォルクスオパーは有名だが、大小合わせるといくつになるのかわからない。しかし驚くのは、そのどこも、十分な観客で満たされていることである。もちろん国立歌劇場などは、今はインターネットでチケットを購入するために多くの外国人がつめかけているが、ウィーン在住の定期チケットの観客も相当数あると考えてよい。いくつかの劇場には私も幾度か足を運んだけれども、年齢的にかなり幅広い地元の観客たちがオペレッタでは大笑いもしながら楽しんでいるのである。この人びとに接すると、これが音楽の都といわれ続ける確かな理由であるように思われる。考えてみれば、オペラもオペレッタもコメディにしても、主題となるのは人間の抱えこむ一筋縄ではいかない矛盾である。オペラではそれが悲劇になったり、愛の喜びへの賛辞として終わったりする。オペレッタやコメディでは、しばしば、人間の表と裏、嘘と演技と本心、名誉と金銭、それらの矛盾のさらに何重にも重なる関係のなかの、ずっとそこにある愛情、といったテーマが、きわどい物語を構築している²⁰。残念ながらここで演目それぞれについて論じることはできない。ここで必要なのは、これらを観ることを必要とする人びとはどのような人か、という点である。少なくとも彼らは、ままたらぬ現実の矛盾を大なり小なり抱え込むからこそ、劇場で人びととそれを共有し、決して孤独でないことを確認し、それを笑えることでフラストレーションの解放を感じたり、人生の喜びを感じたりするのである。ままたらぬ、やるせない世のなかでも、弱い人びとに生きる力を呼び起こす働きをもつのが、エンターテインメントの社会的機能でもある。また、ウィーンのエペレッタ劇場の大部分は、リンク環状通り沿いあるいはその外側にあることも付け加えておかなければ

ればならないだろう。生活のなかの一部として欠かせないものなのである。

音楽について触れずに終わるわけにはいかないだろう。

ウィーンフィルハーモニー管弦楽団は世界一とも二ともいわれる質の高さを誇るオーケストラであることは、だれもが知っている。しかし、そこでいわれる質の高さとは、どのような内容なのかを知るために、ライナー・キュッヒルの言葉を手掛かりにしたい。

ライナー・キュッヒルは、1971年に弱冠21歳の若さでウィーンフィルのコンサートマスターに抜擢され、以後45年間この楽団を支えた伝説のコンサートマスターである。バーンスタインに見いだされたキュッヒルは、才能があっただろうことは当然であるにしても、加えて、彼の音楽への姿勢がまさにウィーンフィル的なもの、だったであろうことは想像がつく。ウィーンフィルの精神ともいわれたキュッヒルの言葉として有名なのは、「指揮者はオーケストラの邪魔さえしてくれなければいい」、という発言であった。これは様々なメディアで伝えられた。素人にはさすがウィーンフィルだからこそその自信あふれる発言だとも思われたが、キュッヒルに言わせると、一般的なオーケストラについて言ったものだという。すなわち、最近では指揮者だけがスターのようにクローズアップされるが、そもそもこの民主的な世の中で、誰かだけが持ち上げられるのはおかしくはないか、ということなのだ。オーケストラは、多様な楽器をそれぞれの演奏者が演奏し、それを聞き合い、音を溶け合わせて、より良い音楽を作ろうとする集団のことだ。だからコンサートマスターといえども、他の演奏者や楽器に学ぶことはいくらでもある。そのように互いの響きを聞き合いながら成り立っている集団の前に、指揮者が来たといって、演奏そのものがガラッと変わるといえるのは、おかしくないか。むしろ、指揮者はこのオーケストラのハーモニーをよく知ったうえで、リーダーとなってくれればよいのだ、という。したがってキュッヒルは、取り立てて影響を受けた指揮者を挙げることはないし、ソリストになろうと思ったことは一度もない、というのである²¹。ウィーンフィルの団員のひとりひとりへの信頼とこのオーケストラへの自負心をこれほどはっきりと語ることに驚かされたことを覚えている。実際、楽曲の中にあるどんなに鮮烈なファンファーレでも、重ねられている他の音をかき消してしまう

ほどの大きな音を金管楽器が鳴らすことは、ウィーンフィルではまずない。観客によっては迫力に欠けるという印象をもつ場合もあるようだが、これこそウィーンフィルらしさなのだ。楽器の違いからくる特性を生かしながらも柔らかなハーモニーは、他では聴くことのできない質の高いものである。「ホモゲーン」とは音を溶けあわすことで、ウィーンフィルのモットーだとされているが²²、これは、楽器の高価さやホールのすばらしさ、という物理的な要因を超えて、この多様性の重なり合う複雑な歴史のなかに生まれたウィーンなればこそその音楽であることの証しである。そして人びとはこの音楽をつうじて、ウィーン精神を確認させ、それを愛するのである。ウィーンの人びとにとって音楽は、余暇に楽しむものではなく、むしろみずからの自画像を確かめるために、必要とされ続けるものなのかもしれない。

ウィーンフィルを世界中誰もが知っている交響楽団にしたのは、世界に向けてテレビ放映されるニューイヤーコンサートである。ここでの指揮者は、クラシック界の話題をさらうニュースでもあるが、2017年のニューイヤーコンサートは、ベネズエラ出身の指揮者グスターボ・ドゥダメルだった。ヨーロッパ外からの指揮者は、小澤征爾とバレンボイム以来である。しかも36歳という若さ。この指揮者がウィーンの人びとから受けている期待の大きさは驚くほどであり、ここにおける音楽がいかに寛容であるかを感じさせられた経験でもあった。そういえば、ヨーロッパ外からの指揮者として初めて小澤征爾が2002年のニューイヤーコンサートに登場した際には、妻が日本人であるキュッヒルが日本語で、満州生まれの小澤が中国語で挨拶をしたという。このような開かれた精神こそ、ウィーンがいまも文化都市として個性を発揮させている理由であり、その価値を世界に通用させることができる理由なのだ。

とはいえ、それは簡単なことではない。前述したように、開かれたとはいっても見えない障壁が残されているウィーンである。それは都市空間だけのことで無く、人びとの意識の中にも近代合理主義が貫かれているわけではない。ニューイヤーコンサートの指揮者にしても、この歴史の中でヨーロッパ外の出身者がたった3人しかいない、というのも、見方によっては開かれているとまで言えないのではないか。今でもインター

ネットではチケット完売でも、チケットブースの担当者との対面のやりとりで手に入れることができる場合もあるし、クラシック好きの団体のメンバーになればその融通はだいぶ楽になり、団員と友人ならもっと自由になる。そういう意味では旧態の社会関係が生き続けているともいえるのだ。しかし、異質なものを飲み込み共存していくウィーン精神は、閉じることはない。2011年には史上初の女性のコンサートマスターに、ブルガリア出身のアベルナ・ダナイローヴァが就任した。キュッヒルの後継のコンサートマスターには、1度もウィーン音楽院で学んだことのない、ブラジル系ドイツ人のジョゼ・ブルーメンシャインを選んだ。彼は30歳の若さである。新しいものを拒否はしないが、受け入れるまでには相当の慎重さと相互信頼の構築と決断を必要とし、その手間を省くことはない。しかしそれも、共存していくために必要な知恵なのである。

5. おわりに——

「オーストリア風ちゃらんぼらん」な文化の強みと弱み

多様性の尊重ということになると一貫性や合理性を求めることは難しい。これはウィーンの人びとが自分たちをさして「ちゃらんぼらんな国民性」(Österreichische Schlamperei) と、笑いながら言わしめる理由である。一見リベラルに見えることがあったとしても、それがほんとうにリベラルなのか、「ちゃらんぼらん」なのか、にわかにはわからない。

ニューイヤーコンサートでは最後のアンコールに、必ず、「ラデツキー行進曲」が演奏される。ラデツキー将軍はトルコ・ナポレオン戦争などに勝利し、サルデーニャ王国や北イタリアの独立運動を鎮圧して、オーストリア帝国最後ともいえる軍事的栄光をもたらした人物である。ヨハンシュトラウス1世は、彼を讃えてこの曲を作曲した。よくよく考えてみれば、ラデツキーによって鎮圧された人びとの末裔たちも、今ではウィーンの主要な住人である。周辺諸国への圧力を行使すること自体に反対するリベラルなウィーン人もかなりいるはずである。しかし、ニューイヤーコンサートでは、みんなが必ずこれを聴き、手拍子で盛り上げ、楽しんでしまう。

ラデツキー将軍といえば、彼が北イタリア独立運動を鎮圧して戻ってきたとき、イタリアでおいしかったカツレツを持って帰った。これがウィナー・シュニッツェルだといわれるが、いまやどちらが本家かわからない。ウィーン人にとってシュニッツェルは、レストランで食べるものというより、家ごとに美味しいシュニッツェルがあるようだ。学生たちと話をしていると、おじいさんのつくるシュニツェルとお母さんのつくるのが、どのように違ってどう美味しいか、という話題になることも多い。家庭の味として、これをウィーンのものであることに矛盾を感じる人はいない。パラチンケンは、クレープにさまざまなものを包んで焼くもので、デザートとして、また食事としてもいただく料理だが、これもウィーンのものではなくハンガリーのものだ。グラーシュという牛肉をパプリカで煮込んだものもハンガリーのものだが、これらもオーストリア伝統料理だと考えているウィーン人がほとんどであり、なんら疑問をもたないのである。イタリアンピザたるや、いたるところに店があり、大好きな料理として挙げる学生も多い。

大学そばの伝統的なウィーン料理屋の一押しのビールは、バドワイザーである。日本人はどうしてウィーンでアメリカのビールなんか、と最初は思ったものだ。ところが、話をしているとこれはチェコのビールだという。中央ヨーロッパのビールはなによりチェコが中心地であり、チェコのバドワイザーは国民的人気があるのだという。そう聞いてから調べると、ドイツ系アメリカ移民がアメリカでビール製造を始めた時に、バドワイザーという名称を使ってアメリカで商標登録してしまったことから、日本ではバドワイザーがアメリカのものだと勘違いされるのだという。ウィーンはこの美味しいチェコビールをウィーン料理の店で看板にして、それでもウィーン料理店であることになんら迷いもない。良いものをよいものとして取り入れるのがウィーン流なのだ。

時間をかけてゆっくりと多様性を受け入れていく、そしてその多様性はウィーンのものとして穏やかに調味され楽しまれてしまう。ウィーンの独自のものなどと厳格に考えること自体が、ナンセンスなのだ。べつにいいではないか、何が問題なのか。これがウィーン的なのである。

しかし、豊かな文化を育んだ大いなる寛容さが裏目に出たのが、ヒト

ラーの台頭を許したことだった。若きヒトラーはウィーン美術アカデミーの建築科を2度受験し、2度とも落ちている。そして後年になって政治家としてウィーンに戻ってきたとき、彼は、芸術や建築に心ひかれるのではなかった。ヒトラーの目は、自分を拒否したこの場所をこれほどに美しい都市に仕上げることに貢献したユダヤ人たちに向けられていた。そこに嫉妬と憎悪が見出されることは、あまりにも悲しい真実だったといえるだろう。

「ゆっくり」という時間の流れかたが許されない時代になればなるほど、ウィーンの多様性の実現は難しいのかもしれない。しかし、このような都市のモデルに接近して考えることは有益な研究であると考えている。

※この論考は、2016年度の成蹊大学海外研修の成果である。

注

- 1 田口晃『ウィーン 都市の近代』2008年、岩波書店、4ページ。
- 2 森本哲郎『世界の都市の物語 ウィーン』1998年、文春文庫、343-345ページ。
- 3 トルコ軍がウィーンに押し寄せた苛烈な殺戮戦争とその後の状況については、その後、記録や絵画の重要なテーマになっている。邦語では、P. ラーンシュタイン、波田節夫訳『バロックの生活』、1988年、法政大学出版会、432-452ページに詳しい。このとき、トルコ軍の引き揚げた後に、多量のコーヒーが残されていたことが、ウィーンカフェ文化のはじまりとされている。19世紀になるとカフェ文化からジャーナリズムが誕生した。カフェハウスの文化的役割については、ユンガー、W., 小川悟訳『カフェハウスの文化史』1994年、関西大学出版部、などを参照。
- 4 この違いは、現在でも質の高い音楽の提供者として世界に1, 2を争う名門、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団とウィーンフィルハーモニー管弦楽団との、音楽性の違いとしても結晶しているという分析がある。野村三郎『ウィーンフィルハーモニー その栄光と激動の日々』2002年、中央公論新社、61-69ページ。
- 5 異質性が対決する歴史としてのウィーンについて、池内紀は20世紀に至るまでも、その歴史の連続性のなかに位置付けている。「一九四五年、ソ連軍と連合軍とは実質的にはウィーンまで来てここにどまったとはいえないか。それは『第三の男』に描かれたとおりである。『第三の男』は、米・英・仏・ソの四ヶ国軍駐留下のウィーンを舞台にした。一九四五年から五五年までの十年間、『冷戦』の名のもとに、世界勢力が激しき対立していたさなか、ウィーンではその勢力の代表者たちが『一台のジープ』に乗って通りを走り、毎週のように会合した」。池内紀『ウィーン、都市の万華鏡』

- 1983年、音楽之友社、65ページ。
- 6 ランゲー、P.H.,『西洋文化と音楽』中巻、音楽之友社、723-734ページ
 - 7 野村三郎『ウィーン三昧』2007年、ショパン社、52-56ページ
 - 8 シェーンブルン宮殿にはマリア＝テレジアが、この乗馬学校でみずから馬に乗り、馬車行列をしたとき（1743年1月）の絵画が飾ってある。これはバイエルンにたいする最初の勝利でプラハを奪還した記念に開催されたものである。その古典馬術の技量は、宮廷の要人と貴賓の招待客たちからの賞賛をうけた。イビー、E., コラー、A., 『シェーンブルン』2007年、ブランドシュテッター社、83ページ、などを参照。
 - 9 野村、『ウィーンフィルハーモニー』43ページ。
 - 10 野村三郎、同上書、82-84ページ。
 - 11 河野純一、『ハプスブルグ三都物語』2009年、中央公論新社。ハーマン、中村康之訳『エリザベート』（上）（下）、2005年、朝日新聞社。塚本哲也『エリザベート―ハプスブルグ最後の皇女』1992年、文芸春秋社、ほか。
 - 12 シュベングラー、村松正敏訳『西洋の没落』1989年、五月書房。マンフォード、L., 生田勉訳『都市の文化』1974年、鹿島出版会、など。
 - 13 ウィーンでは政治に先んじて、音楽の世界において市民的自立の達成があった。1812年の楽友協会の設立、1842年のウィーンフィルの設立は、どちらも、市民の自発的結社としてなされた。現代で言えばNPOのようなもので、個人の自発性と平等に基づく民主主義的組織を世界に先駆けて実現したのである。歴史的なこの組織が、ウィーンという大都市のなかに、社会的空間として人びとの前に物理的に現出したのが、1869年のリング環状通りのすぐ外側、インペリアルホテルに隣接する場所に建てられた建物であった。社会に先んじたモデルを音楽団体が作り上げてきた歴史を考えると、ウィーンが音楽の都と言われることは、音楽の世界を超えた社会史的意味が存在するといえよう。田口、前掲書、27ページ。野村、『ウィーンフィルハーモニー』、138-139ページ、などを参照。
 - 14 リング環状通りの建設については、田口、前掲書、56-78ページ。森本、前掲書、119-122ページ、など。
 - 15 シューベルティアードは、文学者、画家、音楽家、身分の高い人やそうでもない人、着飾った婦人たちなど、新興する当時の中流階級の社交場のような場所であった。ピーダーマイヤー文化（1800年代前半、オーストリアの小市民が身の生活の家具などで飾った、つつまじやかな文化）の象徴でもあった。近代的聴衆については、渡辺裕『公衆の誕生』1989年、春秋社、などを参照。
 - 16 野村、『ウィーンフィルハーモニー』115ページ。
 - 17 シューベルトとフロイトの家は、歩いても30分ほどの近さである。フロイトは論文「文化への不満」のなかで、人間が技術の発展によって神と類似する状態を手に入れたとしても、それによって幸福感を得ているかといえば、そうではないことを論じている。文化が生きる意味を与えるものとするなら、文化への衝動はいかなる代価を払っ

でも獲得しなければならぬのである。しかし文化への衝動とは、さまざまな文化の目に見えない壁への破壊衝動として現れることもある。人間の破壊衝動は、文化の発展によって抑制することができるのか、これはフロイトにとって根源的な問いとなった。嫉妬は格好の研究対象であったことがわかる。ハーニッシュ、岡田浩平訳『ウィーン／オーストリア 二〇世紀社会史』2016年、三元社、512-513ページ。

- ¹⁸ 森本、前掲書、237-241ページ。
- ¹⁹ 「クリムトは、古い流派の若い巨匠として出発し、若い流派の年配の巨匠として終わった。かれはほの暗い、本能に左右された世界を探ろうとする」。ハーニッシュ、前掲書、402ページ。
- ²⁰ 代表的なウィーンのアペレッタを簡単に紹介しよう。「こうもり」年末年始の定番の出し物だが、登場人物はみな自分には退屈していて他人でいたがる人物ばかり。仮面舞踏会の場面では公然とつわりを捨て、行動し始める。そんな大都市の物語である。「ウィーン気質」は、錯覚・取り違え・ニセモノとホンモノのドタバタ劇であるが、それが最後に解けて一件着着するの、また取り違えのためである。くるくる回る真偽のなかに、正確なものを見定められるのか、という物語であるともいえよう。「メリー・ウィドウ」はウィーンのアペレッタなのだが、舞台はパリで、ポンテヴェドロ王国という架空の国も大使館である。ここで旧貴族と結婚した女性と新興ブルジョアたちが、恋の駆け引きを展開する。金銭と恋愛との公正ではないゲームのなかに、恋の真実を見つけられるのだろうか、と、ハラハラさせる物語である。池内、前掲書などを参照。
- ²¹ キュッヒルへのウィーンフィルについてのインタビューは、キュッヒル、L.、野村三郎『キュッヒルの音楽手帳』2016年、音楽之友社、に収録されている。
- ²² 野村、『ウィーンフィルハーモニー』36ページ。異質な楽器の音を溶けあわす文化は、ウィーンフィルがその母体を宮廷歌劇場（のちの国立歌劇場）に由来をもつことにより、より特徴的に育まれてきたと推察される。野村三郎『ウィーン国立歌劇場』2014年、音楽之友社、などを参照。
- ²³ 「自分たちが住んでいる民族の環境とか土地の環境とかに適應することは、ユダヤ人にとってはただ単に外面上の身の保全装置ではなく、内面の奥深くにある要求である。故郷とか、平静、安息、安全、等質性とかいうものに対する彼らの要求は、自分たちを取り巻く世界の文化に情熱的に結合するように彼らを駆り立てるのである。そして十五世紀のスペインにおける場合を除いては、オーストリアにおけるほど、このような結合がうまくいき、実り多かつたことはない。」ツヴァイク、S.、『ツヴァイク全集、昨日の世界I』1973年、みすず書房、42ページ。しかしツヴァイクは、ヒトラーの台頭を目の当たりにして、しばしば同時代人であるフロイトと話したという。ツヴァイクによってフロイトの証言が残されている。「フロイトは言った。自分は衝動に対する文化の優位を否定してきたので、ベシミストだといって非難されてきた。今こそ人は——もちろんそれは彼を得意にはしていないが——人間の魂の

中の野蛮なもの、根源的な破壊衝動というものは根絶できないという自分の考えが、最も恐ろしく裏付けられたことを見るがよい。ことによると、やがて来るべき世紀には、少なくとも諸民族の共同生活においてこれらの本能を抑えつけるひとつの形式が発見されるであろう。しかし、日常生活と最も深い本性においては、これらの本能は根絶しがたい、おそらくは必然的な、緊張を維持する力として存続するであろう、と。」ツヴァイク『ツヴァイク全集、昨日の世界Ⅱ』1973年、みすず書房、626-627ページ。なお、19世紀末からユダヤ人迫害にいたる、国際都市ウィーンとヒトラーとの抜き差しならない関係の歴史については、野村真理『ウィーンのユダヤ人』2000年、お茶の水書房、に詳しい。